第４２回中学生人権作文コンテスト
兵庫県大会
最 優 秀 賞

これから生きていく僕たちの世界

姫路市立神南中学校　３年　小林　奏心

僕は、昨年の文化発表会の『新しい制服のお披露目』のコーナーで、男子の制服と女子の制服を着ました。なぜ、制服のスカートを僕がはいたのか。これは父との会話の中での言葉がきっかけとなっています。

姫路市内のある中学校で制服が新しくなり、女子のスラックスも可能になったという話題が新聞に取り上げられていました。「女子がズボンでもええなら男子もスカートでもええやんなー」と記事を見た父は言いました。そのことを思い出した僕は、文化発表会の制服のお披露目で僕がスカートをはくことを先生に提案し、先生から許可をもらいはくこととなりました。僕がスカートをはくことで、伝えたかったことがいくつかあります。一つは、ジェンダーレスという考えから、選択肢は男子にも女子にも自由にあるということ、もう一つは、男子がスカートをはいていてもそれはおかしくないということ。僕がスカートを実際にはいて、その後のまわりの友達の反応は「お前がはいたら面白いわ」などでした。笑われたり茶化されたりすることもいくらかはあると予想していましたが、なんだか上手く伝わらなかったように感じ、不安になりました。それと本当にＬＧＢＴＱで悩んでいる子がいたら、僕の行動は逆にその子を傷つけてしまわなかっただろうかと思ったりもします。

最近テレビで、色んな場面の絵とセリフが流れるけれど声は聞こえず、最後に聞こえてきたのは「聞こえてきたのは男性の声ですか？女性の声ですか？」と音声が流れるＣＭを見ました。学校のＬＧＢＴＱの授業で『アライグマ（性が分からない）』が「リボンをつけたら？」「ピアノを弾いたら？」どの性だと思うのか？ということをしました。

ＣＭの声やアライグマの性別も、自分の中の今までの経験から得た『印象』や『思い込み』で、「野球をするのは男性」「スカートをはくのは女性」「会社で活躍するのは男性」「育児をするのは女性」と見えてしまう思ってしまう人が多いのでは無いかと思います。祖父母の代は「男の子なのだから…」「女の子なのだから…」という考え方が主流・普通と言われていた時代を生きています。両親の代も、男の子らしく、女の子らしく「男の子の色は黒と青」「女の子の色はピンクと赤」という時代、ＬＧＢＴＱという言葉も聞かれず、生まれた時の体の性と心の性が同じであることは当たり前で普通のことだとされた時代、男の人が女の人の格好をすることを「変わっている」と認識した時代、

三十年ほど前にドラマでも『多様な性』について取り上げられるようになっていったけれど衝撃的だったと親は言います。男だから・女だから…と言われてきた時代から月日を重ね僕たちが生きている今の時代はＬＧＢＴＱについても、一人一人の個性についてもずいぶんと自由になり、尊重され、語り伝え、理解し、生きやすく過ごしやすくなるよう、日々色んなところで色んなことが考えられ広がっているように思います。

姫路市でも令和四年四月に『パートナーシップ宣誓制度』を開始したという手紙をもらいました。授業でも『多様な性』『ＬＧＢＴＱ』などについて勉強しています。たくさんの知識と情報に触れるチャンスがあります。自分以外の人、家族、大切な友達、身近にいる人のことをいっぱい知っていくためにも、このチャンスは大切にしたいと思います。

色んなことを学んでいる僕だけれど、自分の中に『印象の壁』みたいなものがあって、「リボンをつけたら女子」というような思い込みになっているように思います。僕はこの『印象の壁』を壊していきたいと思っています。「こんなタイプの子はきっとこういう考え方だろう」「このタイプの子はきっとこんな行動するだろう」など、人の持っている個性も「きっとこんな感じ」と思い込んで接してしまわないようにと思っています。相手と会って、たくさん話をし、相手の考えや思いを聞いて、僕の思いを話して伝えて、そして僕は相手のことを知っていく。今の僕はそうしながら、相手を僕の思い込みの『型』や『印象の壁』の中にはめ込まず、相手の個性を知っていくようにしていきます。

僕は文化発表会でスカートをはくことで、ジェンダーフリーについて自分なりに考えるきっかけが出来ました。多様な性について知ろうとすることは一人一人の『個性』についての見方も考えるきっかけとなりました。性とは一番目に見えて、一番目に見えにくいものと感じています。個性もパッと見えるものの下にそれぞれの思いがあると感じています。

相手をよく知ろうとしていないのに否定的になることはなく、しっかりと向き合って相手のことを知っていき、僕の大切な仲間を増やしていけたらいいなと考えています。